

だんらん空間に関する研究(第1報)

(その1) 調査対象及びだんらん空間の構成

大阪教育大 ○岸本幸臣 神戸山手女子短大 中西真弓

目的 住宅の平面計画においては、人・空間・行為・意識の関わりの中で、好ましい空間のあり方が追求されねばならない。本研究は住生活の中心となるだんらん空間に着目しそれを多面的にとらえ、そこから住み方研究や平面計画研究の新しい課題を把握しようとするものである。とくに戦後普及した「公私室型平面計画論」を再考するうえで、だんらん空間を核とした公私室型平面のあり方、住生活としての公私の行為の重層性等を明らかにすることは、重要な意味をもつものと思われる。本論ではまず初めに、調査対象の属性とだんらん室の平面構成について述べる。

方法 だんらんの実態を把握するためアンケート調査を実施した。調査対象は、住生活面で私的生活空間の必要性の高い世帯であることや、自宅の平面図の表現能力が求められるため、成人の子供を有する世帯とした。対象は神戸市内の女子短大生282名とその家族(母・父・きょうだいを含む)で、学生は直接自記法、家族は留置自記法とした。自宅の平面図は学生に作図させた。調査実施期間は昭和60年7月1日～7月8日の1週間である。

結果 (1)調査対象の基本属性 都市及びその近郊に居住する典型的な核家族世帯が8割を占め、世帯主の平均年齢は49.5才で、平均家族人数は4.5人である。住宅条件はかたまり恵まれており、持家層(86%)と戸建層(77%)が多く、平均室数も6.5室に達している。(2)だんらん室のプラン類型 平面図で分けると「L+DK」型は74%、「LDK」型は13.0%である。だんらん室の平均面積は8.4畳で、だんらん室の数は1室が52.8%、2室が29.3%となり、だんらんの目的・行為の多様性・起居様式により、複雑化することが伺えた。